

ろいろ集めているという話を聞いた父が連載を依頼したとエッセイの中に書いてありました。お子さんの成長とともにネタがなくなってしまうので三十五回で終了しました。

富士田元彦さんの「思い出す人々」は二〇〇九年七月から二〇一〇年六月まで十二回続きました。富士田さんは二〇〇九年十二月十八日に敗血症で亡くなりましたが、原稿を先に入れておられたので亡くなった後も連載が続いたそうです。

谷岡亜紀さんの「言葉の位相」は二〇〇九年七月から始まり、二〇一五年までで七十九回を超えました。かなり長くなってきました。

そして野口修二さんの「コンゴ便り」は二〇一四年十一月から連載中です。

幸綱 小紋君はたくさん本を持っていて、自分の持っている本について、それらを持つている人がいなくなっているから、具体的にその本を目の前に置いて書くというモチーフで始めたものです。たいへん珍しい本もずいぶん入っている。前川佐美雄の『植物祭』、『新風十人』、あるいは落合直文の『萩之家歌集』は本物がなかなかないん

だ。三浦守治の『移岳集』なんて、僕もほとんど知らない本です。

黒岩 小紋さんらしかったのは、編集者なので、自分も歌集を編んだりしているわけですから、判型とか、全部で何ページとか、何号活字を使っているとか、データが必ず載っているのが面白い。

幸綱 そのもの、歌集の実物が手もとにないと書けない、貴重な連載だったね。彼は歌集をずいぶん集めていた。だから書けた連載だった。

頼綱 小紋さんの蔵書は今どこにあるんですか。

幸綱 信綱記念館にすべてある。多くの人に利用してもらいたいね。

奥田 僕や大口玲子さんもそうですが、ときどき呼ばれて小紋さんの家に蔵書の整理に行きました。すごい蔵書量なんです。本棚と本棚の間の迷路を蟹みたいに横向きになつて進むような。でも、本の整理は口実で、小紋さんが「この本は二冊あるから、お前にやるよ」と言ってくれたのが、川田順の歌集だったり木下利玄の歌集だったり。「心の花」の歌人の本なんです。あとになつて「心の花」に何か書くときに生

きたのは、結局、小紋さんからいただいた本でした。僕に限らず小紋さんにお世話になつた後輩はたくさんいると思います。

黒岩 一つだけエピソードを。小紋さんは二〇〇六年一月号に信綱の『瀬の音』を書いています。実は小紋さん、それは持つてなかつたんだ。僕は古本屋で買って持っていたので、「お前、譲れ」と言われて、譲らされて、代わりに何かを買つたなあ。

谷岡 さつき病床の小紋さんから電話があつて、馬場昭徳さんから「今日、小紋さんの歌集が出ました。皆さんによくお伝えください」と言つてました。

幸綱 小紋潤歌集『蜜の大地』の見本、朝できてきたんで、あとでみなに見せます。

「古歌を慕う」は森朝男君です。古典和歌について何か連載が欲しいというので、いろいろ考えた結果、早稲田大学の研究室で僕のちよつと後輩だった森君にお願いした。彼は『万葉集』の研究者だけど、古典全体を幅広く勉強しているので、自由に書いてほしいということで連載を頼みました。おかげさまで大好評。「心の花」の看板の一つになった。

黒岩 森さんは大学で古典を教えていらつ